
the Star Festival of Kaito

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e S t a r F e s t i v a l o f K a i t o

【Nコード】

N 2 7 6 6 C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

7月7日、七夕。タイトルそのまま快斗の七夕です。快斗×青子。久々に書きました♪そんなに長くないので、スラスラと読んでいただけたら嬉しいです☆

「観念しろ、キッド！！貴様も今日で終わりだ！！」

「おや、こんばんは、中森警部。今日はまた一段と早いお着きですね」

「ふん・・・ここも見張ってたからな！！」

「それはそれは・・・さすがですね」

7月7日。七夕というロマンチックな夜。

満天の星が輝く空の下、物騒な会話・・・いや、1人は物騒で、1人は飄々とした様子で会話をしていた。

ビルの屋上で、本日の戦利品の確認をしていた“確保不能の大怪盗”と謳^{うた}われる怪盗キッドが、飛び込んできた馴染みの警部と対峙していた。・・・が、

「すいませんが、警部。本日は少々急ぎますので、警部とゆっくりお話している時間がないのです。申し訳ありませんが、これにて失礼☆」

と言うやいなや、POM☆と煙幕を張り、警部が何も言えずにむせている間に

自分の羽根で夜空へと飛び去った。

いつもなら、こんな失礼な去り方をしない怪盗紳士がこんなにも早くに立ち去ったのには理由^{わけ}がある。

それは今の時刻、8時——怪盗にしては少々早い時間だが——から約7時間ほど前にさかのぼる。

怪盗キッドこと、黒羽快斗が本日の仕事に向け、着々と準備をしていた時。

家の電話が鳴り響いた。他に誰もいないため、快斗が出ると、相手は幼なじみの青子。

「あ、もしもし、快斗？あのね、今日七夕でしょ？近くに住んでるおばあちゃんが笹の葉分けてくれたの！！だから七夕パーティーやろうと思ってるんだけど・・・快斗、来れる？」

と、最初は嬉しそうに言っていた青子が、最後の方だけ心持ちテンションが下がっている。

それに気づかない快斗ではなく。

「うーん・・・今夜、かあ？何時？」

「8時だよ。最近夜も明るいから」

「8時かあ・・・」

仕事・・・終わるかなあ・・・いくらいつもより早い時刻の予告とはいえ・・・と口に出さずに悩んでいると、電話口で

「・・・無理、かな」

と心細い声がしたのを聞き、

「なんとかなると思う！ただ、少し遅れるかもしれないけど・・・」と返事をしていた。

「ホントッ！？じゃあ、待ってるからね♪」

「おう。しかし、青子もお子様だよなあ・・・七夕パーティーなんて！」

「な、なによお！いいでしょ！！」

「ケケッ・・・」

「じゃあ、待ってるからね！！」

という声で電話は切れた。

「さて、仕事・・・早くしねえとな！」

そして、いつも以上の早さで目当ての宝石を奪い、冒頭に至る。

「やっべえ・・・急がねえと！」

と近くのビルに降り立ち、周りに誰の気配もないことを確かめてから快斗に戻り、呟く。

そして、青子の家へと走った。

8時20分。

息を切らして青子の家に到着。

「青子ー！来たぞ？」というと

「あ、来た！上がってー！！」と奥から声がした。

「おじゃましまーす・・・」と言いつつ靴を脱ぎ、家に上がる。

「快斗、今ね、短冊にお願い事書いてたの！快斗も書いてね！」

と、青子は嬉しそうにオレンジ色の長方形の紙を渡す。

「願い事、ねえ？」

と言いつつ、青子のをチラッと見ると、

『お父さんがキッドを捕まえられますように』

と書いてあり、苦笑い。しかしその後すぐに、自分の願いじゃねえんだ・・・と思い、その苦笑は微笑に変わる。

そして、自分も考える。・・・が、思いつかない。

「快斗ー、まだあ？早く飾りたいんだけど・・・」

「うーん・・・。何がいいかな？」

「早くしてね？」

と、青子は急かして台所へと入っていった。

そんな青子を見つつ「よし、決めた!!」と小さく呟き、サラサラと記入。

それを笹の葉に取り付け、庭へと出す。笹の葉を眺めていると、

「快斗、書けた?・・・あ、出してくれたんだ!ねえ、ケーキ食べよ!」

と青子が戻ってきた。

「お、ショートケーキ、七夕仕様じゃん♪」と嬉しそうに部屋の中へ。

その部屋から明るい光と笑い声が漏れ、光が笹に飾った快斗の短冊を照らし出す。

—————たった1日だけじゃなく、毎日側にいたい—————

(後書き)

みなさま、こんにちは。ペロコです。

記念日小説☆今回は、七夕です♪どうも、こういった小説を書くのがスキらしく、30分で書き上げました。

☆久々に書いた快斗&青子。最近、コナンくんや新一との対峙が多かった快斗にとってみたら、少々甘さの残る作品にしてみたかったです、いかがでしたか？

☆せっかくの七夕なのに、全国的に曇りか雨。ですが、小説の中ではきちんと晴れにしておきました。ま、こうじゃないとってことで♪

☆それでは、またしても突発的な小説にお付き合いありがとうございます！！
いました。評価やコメントなどいただけたら嬉しいです！！
これからもよろしくお願いしますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766c/>

t h e S t a r F e s t i v a l o f K a i t o

2010年10月9日02時13分発行